

# 四季の生活図鑑 4

## 真砂三千代

服飾デザイナー

布には生命がかよっていた。

美しい布の生まれる場所には、

気持ちのいい暮らしがきっとあります。

真砂三千代さんを追って、

葉山と西表島を結ぶ布人たちの糸をたどってみました。

西表島—葉山  
“布人”を結ぶ糸

構成・文 堀口博子

撮影 飯田裕子





海水と川水が混じり合うマングローブの水辺は、“真南風”的ふるさとです。

## 島の自然に見守られながら、生まれた衣のかたち。

真砂三千代さんは、着心地を糸から考える服飾デザイナーです。糸の産地に関心を寄せ、天然布や天然染色に親しみ、だから「ファスナー」や金属のボタンを使いたくない、「服に縛られない、心と体がいつも自由でいられる服づくり」を大切にしています。

自主ブランド「アファ」を主宰して15年。アファの服には、どこか日本のきものの伝統が受け継がれているように思えます。インドやタイ、ラオスの村々で織られる上質な絹や麻布をたっぷりと使い、きもの好きにはこたえられない、あの衣擦れの感触を存分に味わせてくれる服を現代に提案し続けています。その真砂さんが、自らの創造の場として愛してやまない場所があります。沖縄、西表島いりおもてです。8年前、西表島の布人、石垣昭子さんと出会い、そのおおらかで奥深い人柄と島の暮らしに魅かれ、西表通いが始まりました。

西表島は古来より、東南アジアの国々と海のシルクロードで結ばれさまざまな交流があったと言われるよう、あの独特な沖縄音階はバリ島のガムランに似て、衣食住にもいくつもの共通点を認める人は多いでしょう。もともとアジアの暮らしに強い影響を受けていた真砂さんにとっても、昭子さんの住む西



エコツーリスト・オフィスで働く永井さんと西表手仕事センターの研修生鷺野さんに真南風を着ていただきました。真南風は東京・青山の真木テキスタイルスタジオで扱っている。

☎03-3407-0107

テ  
ー  
シ  
ョ  
ン  
ブ  
ラ  
ン  
ド

昭子さんが島の植物から糸をつくり、布を染め、千秋さんが織り、三千代さんがかたちに結ぶ。だれ一人欠けても生まれえない衣。女たちの島を愛する静かな思いが重なり、純粹なものづくりの情熱が真南風には込められています。

島の生命が一斉に輝く5月、若夏(ウルチム)を島に知らせる風「真南風」から、その名は付けられました。羽のように、風のように軽やかな着心地は、西表島の無垢な自然そのものです。



芋科の植物、紅露(クール)で染めた赤は西表ならではの深い色合い。



島の福木で染めた黄色。芭蕉と苧麻と絹で織られている。



真南風<sup>マナバ</sup>は、天然の衣。羽のように、風のように。

## “布人”を結ぶ糸 西表島

表島での日々は、日本人として心からアジアに目覚めるきっかけになつていったそうです。

「欧米人がアジアを見る時のようなエキゾティックな視線ではなく、等身大のアジアそのものが西表島にあつたんです。祭りを生活の中心に据えて米をつくり、糸をつくり、染め、機を織る。そうした文化が、私たち日本人のルーツにもちゃんと在るつてことをこの島が教えてくれました」

「そうして過ごした島の時間が、ひとつのかたちになつたのは3年前。東京のテキスタイルデザイナーの真木千秋さんと西表の昭子さんを何度も訪ねるうちに、気の合う布人同士の交流が真南風となつて実を結びます。真南風は、3人のつくるコラボレーションブランドです。

昭子さんが島の植物から糸をつくり、布を染め、千秋さんが織り、三千代さんがかたちに結ぶ。だれ一人欠けても生まれえない衣。女たちの島を愛する静かな思いが重なり、純粹なものづくりの情熱が真南風には込められています。

島の生命が一斉に輝く5月、若夏(ウルチム)を島に知らせる風「真南風」から、その名は付けられました。羽のように、風のように軽やかな着心地は、西表島の無垢な自然そのものです。



# 紅露工房で布と向き合う。味加減をみるよう、色加減を確かめ合う。



深い山河がラグーンの海へと切り込む独特の地形を有する西表島は、世界でも有数のマングローブの生息地。こうした手付かずの自然を残し、天然記念物であるイリオモテヤマネコと共に生える環境を未来へとつなぐことが、この島の発展の条件と願う昭子さんは、島に嫁いで間もなく紅露工房を移します。夫の金星さんとともに西表の染め織を再生し、島の産業として興そうとしています。真南風とは、こうした島人の夢を担う衣でもあつたのです。

東京青山での真南風新作発表を1ヵ月後に控えた4月下旬、染めの仕上げを確認するため西表へ向かう三千代さんに同行し、その仕事ぶりを見せていただきました。

4月とはいえ、真昼に照りつけ

る太陽は真夏の勢い。工房の庭では染めの準備が進んでいます。鍋に染料となる福木の根や皮を放ち2時間ほど煮込みます。染め液の中で布がみるみる黄金色に染まっていきます。昭子さんの動きをじっと見つめる三千代さん。「そろそろね」、昭子さんの声を合図に、ふたりは阿吽の呼吸で布を引き上げ、すぐさま布を太陽の下で広げると、色はぐんぐん彩度を増していきます。



生命はつながっている。それを知りたくてここへ通っている。



写真上・くちなしの実は、目も眩むような鮮やかな黄色に染める。写真下・真南風は、島の草木だけで染める。



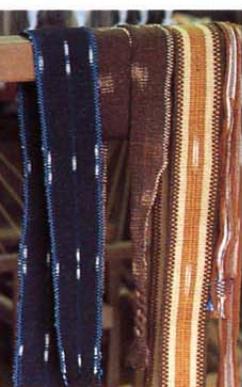
亞熱帯気候の西表では、染料となる植物は豊富だ。





写真右頁/海ざらし。染め上げた布を海でさらし、淨める。写真右/着方にみんさー織を加えた今年の真南風。

写真左/石垣昭子さんは竹富島の織の伝統の家に生まれ、東京の美大で学び、グラフィック・デザイナーを経て、西表に嫁ぎ、島の織りを復元した。



紅露工房は布人たちの聖域。工房に風が吹き抜けると、布たちが気持ちよさそうにはためく。



自然のなかで体を動かしていると、頭だけでは分からなかつた答えが浮かぶ。

それは、自然の力をさまざまと見せつけられた一瞬でした。「太陽の色だね、福木は」。昭子さんの言葉には、島で暮らす人でなければ表せない”本当”があります。

かつて真砂さんは、昭子さんの住む祖納村<sup>そない</sup>で毎年秋に行われるシチ祭で見た祭の衣装の美しさに、服飾デザイナーとしての自分の役割を確認したと言います。衣装はすべて昭子さんらが復元したもので、やはり島の植物から糸をつくり、染め、織ったものでした。

「西表に行くようになって、布のもつている意味を考えるようになつた」。魂のかよつた布には、普遍的なカタチが見えるまで鍊は入られないと話す三千代さんは、解けばまた元に戻る一枚の布をひねつたり、結びながら着付ける真砂三千代流の衣のあり方を模索してきました。その自らの布の営みの根っこを西表の祭に見たのです。「人のいのち、自然のいのち、衣のいのち、全部つながっていることを知りたかった」。探していた現実は西表にありました。「紅露工房で体を使つて覚える仕事は、頭だけでは出せない答えの深さがある。だからまたここへ来たくなるのね」。



島の恵みを生かした染織を根付かせたい」と、20年間奮闘してきた石垣昭子さん。そして昨年竹富町立の「西表手仕事センター」が完成した。内外の染織技術の交流を目的に、毎年研修会が開かれている。  
■問合せ先:竹富町役場農林水産課担当/宮良  
☎09808-2-6191

“布人”を結ぶ糸

西表島

島が教えてくる。着ることも、  
食べることと同じぐらい大切だつてことを。



「食材は、買わなくとも村をひとめぐりすればどこかにあるよ。買うのは醤油ぐらいだね」。昭子さんの豪快な島料理は、海藻、野菜、豆腐などをふんだんに使った長寿食。青いパパイアは、淡いカボチャのようで、豚肉を煮込んだラフティと絶妙のとりあわせだった。



「機織りと豆腐づくり。このふたつができる  
ければお嫁に行けないと言われて育った」昭  
子さんにとって、食べることと布をつくるこ  
とは暮らしの基本です。

畑の糸芭蕉の手入れをする日、昭子さん  
が島料理を披露してくださいました。青いパ  
パイアを探しに周囲を散策、丸々とした見事  
なパパイヤをいくつも抱えた昭子さんが「あ  
つたわよ」と悪戯っ子のような笑顔で戻つて  
きました。それはどこか思い通りの獲物を仕  
留めた狩人のようでもあります。

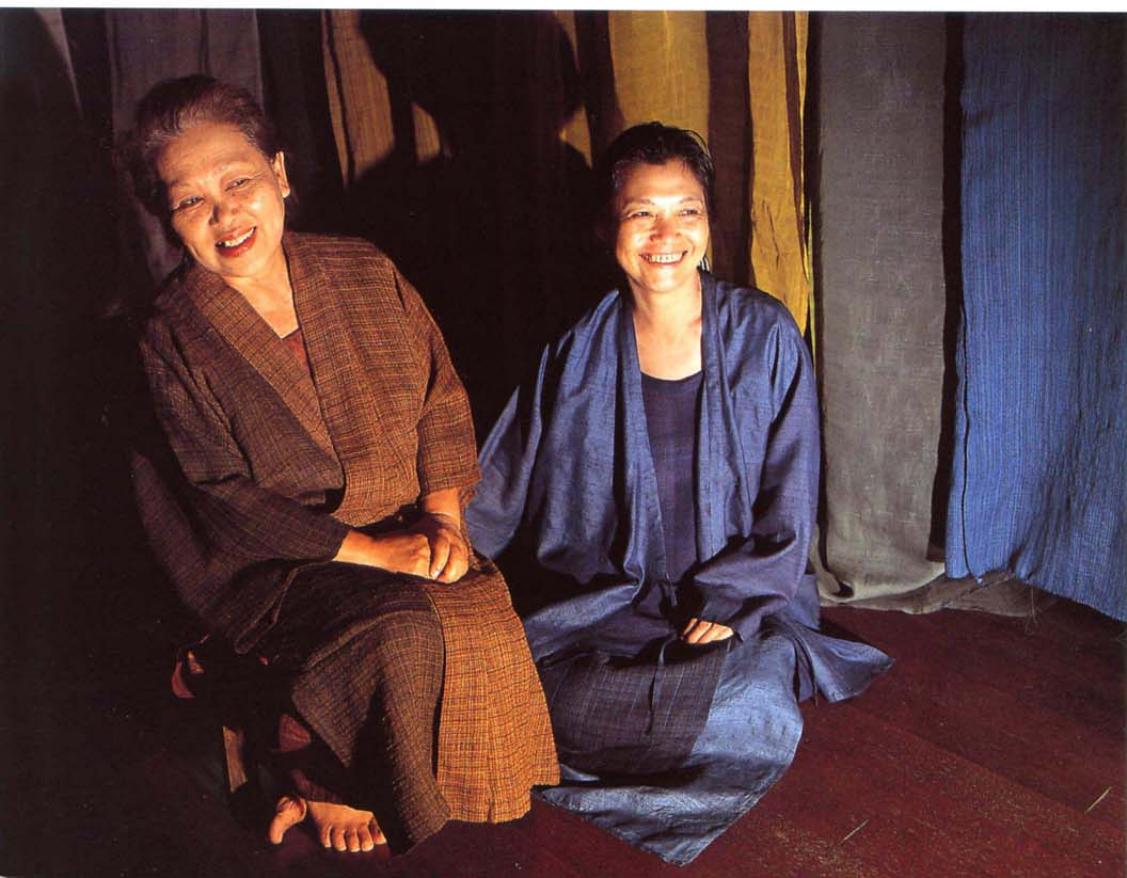
食卓に並んだご馳走の数々。なかでも糸芭  
蕉料理に一同興味津々。芭蕉の芯を湯がいて  
油味噌でいただくのですが、これがたいそう  
美味。味はホワイトアスパラに近く、蜘蛛の  
糸のような無数の繊維質が不思議な食感で  
す。芭蕉布が沖縄を代表する織物であること  
は周知の通りですが、その芭蕉を食べること  
を知っている人は島でも少ないとか。竹富島  
で生まれ育った昭子さんの祖母から受け継い  
だ貴重な一品です。糸を織り、糸を食べる。  
自然の恵みを余すことなくいたたく島の暮ら  
しに、ゆたかさの本質を想つた一日でした。

“布人”を結ぶ糸

## 西表島



糸にはならない芭蕉の芯を取り出し、調理する昭子さん。芯はホワイトアスパラのようにやわらかい。



昭子さんは、なんでも  
少女のように楽しんでも  
しまう人。